

# 学位論文要旨

学位論文題目 総合的な学習の時間の話し合い場面における「協働」の質を高める授業づくり支援に関する研究

申請者氏名 藤上真弓

本論文は、総合的な学習の時間の話し合い場面における「協働」の質を高める授業づくり支援に関する研究をまとめたものである。

第1章では、総合的な学習の時間の話し合い場面における「協働」に課題が生まれる要因に着目し、本研究の問題意識について整理した。現在の総合的な学習の時間では、「匿名性に埋没」(秋田、2012)する子ども、「活動に積極的に参加せず、グループの成果を『タダ乗り』する」フリーライダー(蒲生、2023)になる子ども、目的意識もたないままに教師が発した問いに反応するだけの子どもを生み出すような、一人ひとりの子どもに「学びの舞台」(石井、2022)が保障されない取組も見られ、単元の課題解決の過程で設定されるクラスメイトとの話し合い場面の「協働」に課題があると指摘されている。これでは、一人ひとりの人生に楔を打つような課題解決にはつながらない。このような状況が生まれる要因は、総合的な学習の時間の話し合いは教師の経験則のもとで設定されることが多く、話し合い場面において「協働」する子どもたちの姿のイメージやその姿を具現化するための教師の役割が暗黙知のままであることが挙げられる。総合的な学習の時間に関しては、授業改善する手がかりを得る研修機会にも教師は恵まれていないため、教師が話し合い場面における「協働」のイメージとそれを具現化する方略を獲得することが保証されていない。そのため、話し合いやその設定に至るまでの教師の思考・判断の様相や思考・判断の手がかりとする視点やイメージを顕在化し、教師と共有することが求められることを指摘した。

第2章では、本研究の位置付けを行った。総合的な学習の時間で目指す子どもの姿は、社会から発せられた問いに応える学びを展開するという意味として、「応答責任」と訳されることが多い「レスポンシビリティ (responsibility)」の概念と重なる部分が多い。しかし、その用語は行政責任論で用いられてきたものであり、総合的な学習の時間における学びの在り方と関連付けて検討がなされてきたわけではない。そのため本研究では、関連用語の概念検討を踏まえ、総合的な学習の時間における「レスポンシビリティ」について定義し、子どもたちがクラスメイトとともに課題解決を図る中でその姿に至るには、話し合いが重要な役割を果たし、子どもたちの学びの状況に照らし合わせて、意図をもって話し合い場面を設定する必要があることを描き出した。それとともに、話し合い場面における「協働」をコーディネートする困難さが「カリキュラム展開上の足かせ」(神田・松井、2022)になっていることから、一単位時間の話し合い場面における「協働」に焦点を当てて研究する意義について述べた。また、教師の力量形成に関わる先行研究の検討を通して、若手教師が置かれている状況下においては、伴走者として学びと成長を支援するツールを作成する必要があること、話し合い場面において「協働」とそれを具現化する方略のイメージの獲得だけでは授業改善には向かいにくいこと、イメージを実際の授業につなぐ教師の思考・判断の様相を詳細に描き出す必要があることについて指摘した。

第3章では、本研究の目的について述べた。本研究では、『総合的な学習の時間の話し合い場面における教師の思考や判断の様相、および「協働」のイメージと方略を明らかにし、それをもとにした授業づくり支援ツールを開発して研修プログラムを実施することによって、授業づくりの経験が浅い若手教師が、話し合い場面における「協働」の概念をより具体的に理解し、適切な方略を見極めるための手がかりを得ることができ、その結果として、授業づくりに対する自信の向上が期待できる』ことを研究仮説として、研究を進めた。

第4章では、本研究の第一ステップとして、暗黙知のままであった話し合い場面における「協働」のイメージとそれを生み出す方略について整理した。ここまでの概念整理で見いだした総合的な学習の時間における「レスポンシビリティ」の姿を具現化するために必

要な話し合い場面において現れてほしい子どもたちが「協働」する姿について定義し、話し合い場面における「協働」を見取る視点として、以下のように整理して提案した。

- ・話し合いをしているクラスメイトの互いの背景にある思いや願い、見方・考え方をとらえようとする「分かり合おうとする姿（①双方向性、②共通性・差異性、③共感性・誠実性、④論理性、⑤具体性）」を見取る視点
- ・課題解決に必要な概念や方略を見極めたり、創造したりすることを繰り返しながら、自分たちが設定したゴールに向かっていく「見極める・創造する姿（A独創性、B柔軟性、C主体性、D整合性、E鋭角性、F広角性、G方向性、H調和性）」を見取る視点

さらに、子どもたちが総合的な学習の時間における「レスポンスビリティ」の姿に向かうために必要な話し合いを展開できるまでの段階について、質的発展的段階（第1段階：無目的、第2段階：プレゼンテーション的、第3段階：協働的、第4段階：協働）に整理した。その質の違いについては、教師と子どもの関係、子どもと子どもの関係、子どもたちの思いや願いの醸成の程度、子どもたちの課題との向き合い方に着目して、「協働」を阻害する要因とも絡めて整理した。

第5章では、本研究の第二ステップとして、第4章で整理した知見をもとに授業づくり支援ツールを作成した。この授業づくり支援ツールは、教師が話し合い場面を構想するために用いる「授業デザインシート」と、「授業デザインシート」を適切に活用し、話し合い場面における「協働」のイメージ、質が低くなりがちな話し合い場面とその留意点、主眼に照らし合わせた発問例、話し合い場面を構想する教師の思考・判断の様相や過程を示した『「協働」に向かう授業づくりガイドブック』から構成されている。これは、平嶋ら（2011）（2015）のキット（Kit）ビルド（Build）方式の考え方をういて提供する流れをつくった。

第6章では、本研究の第三ステップとして、授業づくり支援ツールを研修プログラムの中で試行し、活用可能性を探り報告した。本研究で試行した授業づくり支援ツールは、若手教師にとって、話し合い場面における質の高い「協働」のイメージとそれを具現化するための方略を明確にし、自分の取組の現状を見つめ、質の高い「協働」の授業づくりを行う上での手がかりとなっていた。若手教師はこれらのツールがあることで、目指す子どもの姿を具体的に描きながら、適切な方略を見いだすことができるという実感を持ち、授業づくりに対する自信度を高めていった。また、勤務校の取組上の課題に向き合おうとする意欲を高める役割を果たしていた。これは、最初に、総合的な学習の時間で目指す姿と話し合い場面の設定を関連付けてとらえる必要性や本時の主眼と見取り、発問を関連付けていく重要性、「協働」を阻害する要因をとらえながら、話し合い場面における「協働」やそれを具現化する方略のイメージの獲得を企図し、その後徐々にイメージを実際の授業につなぐ教師の思考・判断の様相や過程を詳細に描き出した『「協働」の授業づくりガイドブック』にふれる流れでツールを提供した成果であると考えられる。

最後の第7章では、本研究の総括と課題について述べた。本研究の課題は、作成した授業づくり支援ツールは若手教師の「協働」の授業づくりに一定程度寄与しているものの、若手教師が「総合的な学習の時間の授業づくりに自信がある」と言い切るまでの支援ツールには至っていないことである。今後、若手教師が本支援ツールを活用しながら授業実践を積み重ね、子どもの姿が変わったという手応えを得る機会を掴んでいくと同時に、支援ツールの構成要素の名称や意味、要素間の関係性について再度見直して、手応えを得られやすいツールに進化させていくことが必要である。また、小規模の質的データ分析に有効と言われるSCATによる手法をもとに若手教師の意識とイメージ、方略の変容という視点から分析を行い、授業づくり支援ツールが一定の効果的であることは分かったが、研究対象者の数が少ないことはその効果に対しての課題であると考えている。さらには、教師が自信をもっていく過程を見取って成果を検証する方法も開発していく必要がある。このことを踏まえ、今後、総合的な学習の時間に対して教師がもつ自信や興味・関心の度合いの違い等、多様な意識に対応した検証や、長期的に学校現場で活用を図った上での検証、教師の成長をとらえる検証方法の吟味が必要である。さらに、より多くの教師や学校において授業づくり支援を行うための知見を得て、それをもとにして長年の課題である総合的な学習の時間における取組の格差を埋めるための研究につなげていきたいと考えている。

## 学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 <b>182</b> 号	氏 名	藤上 真弓
論文題目	総合的な学習の時間の話し合い場面における「協働」の質を高める授業づくり支援に関する研究		
<b>(論文審査概要)</b>			
<p>本学位論文は、総合的な学習の時間の話し合い場面における「協働」の質を高める授業づくり支援に関する研究について論じたものである。研究仮説を『総合的な学習の時間の話し合い場面における教師の思考や判断の様相、および「協働」のイメージと方略を明らかにし、それをもとにした授業づくり支援ツールを開発して研修プログラムを実施することによって、授業づくりの経験が浅い若手教師が、話し合い場面における「協働」の概念をより具体的に理解し、適切な方略を見極めるための手がかりを得ることができ、その結果として、授業づくりに対する自信の向上が期待できる』と設定した。この研究仮説を検証するために検討すべき研究課題を以下の5点に設定した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 総合的な学習に時間の話し合い場面における「協働」とはいかなるものか。</li> <li>(2) 総合的な学習に時間の話し合い場面における「協働」の質をどのような視点から見取っていけばよいのか。</li> <li>(3) 総合的な学習の時間の話し合い場面において目指す「協働」を具現化するまでに、子どもたちの話し合いはどのような段階を経るのか。</li> <li>(4) 総合的な学習の時間の話し合い場面を設定するまでに、教師はどのような思考・判断を行っているのか。</li> <li>(5) 総合的な学習に時間の話し合い場面における「協働」の質を高めることができるよう教師を支援するためには、どのようなツールが求められるのか。</li> </ol> <p>これらの研究課題について、以下の論文構成により解決を試みている。</p> <p>第1章では、序論として研究の背景と総合的な学習の時間の話し合い場面における「協働」に対する問題の所在を示して、話し合いやその設定に至るまでの教師の思考・判断の様相や思考・判断の手がかりとしている視点やイメージを顕在化することが求められることを指摘している。第2章では、本研究の位置づけとして、総合的な学習の時間における「レスポンスビリティ (responsibility)」を整理し、課題解決における「協働」の重要性を検討して、自分ごととして話し合いに向かっていく姿を生み出すことが重要であることを示している。その姿を生み出し、課題に向き合い、協働的な解決へと進むための教師の役割や支援の在り方を明らかにする必要性が述べられている。さらに、教師が話し合い場面の設定や支援方法が具体的にイメージできなかつたり、研修機会が少なかつたりすることから、教師に対する授業づくり支援ツールの必要性を指摘し、教師の成長を促す仕組みの構築が求められることを示している。これらの研究の背景を踏まえて、第3章では、改めて研究の目的と検討すべき5つの研究課題が述べられている。</p> <p>第4章では、最初に、総合的な学習の時間を担う教師に必要な資質・能力について整理している。次に、「レスポンスビリティ」を果たそうとする姿を生み出す総合的な学習の時間の話し合い場面における「協働」とは、互いの背景にある思いや願い、見方・考え方をとらえようとする「分かり合おうとする」姿(5つの具体的な視点: ①双方向性, ②共通性・差異性, ③共感性・誠実性, ④論理性, ⑤具体性)と、課題解決に必要な概念や方略を見極め、創造することを繰り返しながら、自ら設定したゴールに向かっていく「見極める・創造する」姿(8つの具体的な視点: A独創性, B柔軟性, C主体性, D整合性, E鋭角性, F広角性, G方向性, H調和性)の2つの姿を見取ることができるとの学びの様相であることを導出している。さらに、話し合い場面において目指す「協働」に向かうまでの段階について、「協働」を阻害する要因とも絡めながら、4段階(協働, 協働的, プレゼンテーション的, 無目的)の質的發展段階に整理している。</p>			

第5章では、総合的な学習の時間の話し合い場面における「協働」を見取る視点やそれに関連して導出した知見を基にして、授業づくり支援ツールを開発している。このツールは、話し合い場面における「協働」のイメージ、話し合い場面とその留意点、主眼に照らし合わせた発問例、話し合い場面を構想する教師の思考・判断の様相や過程を示した『協働』に向かう授業づくりガイドブック」と、これらのガイドブックを参照して教師が話し合い場面を構想するために用いる「授業デザインシート」から構成され、使い方や事例も記述されている。第6章では、授業づくり支援ツールを用いた研修プログラムが若手教師の授業づくりに及ぼす影響を検討している。SCATを用いた質的データ分析の結果として、教師の自信度向上や「協働」のイメージの具体化、話し合い場面の設計力向上に寄与する可能性があることが確認された。特に、授業デザインシートとガイドブックを活用することで、教師が総合的な学習の時間の話し合い場面をより意図的に設計し、授業改善ができる可能性を得られた。しかし、完全な自信を持つまでには至らず、継続的な研修や自主的な学習が必要であることも明らかとなった。最後に、第7章では、本研究の成果と今後の課題を述べている。

以上の学位論文の内容から、審査委員会は次のように評価した。

#### 1. 創造性について

従来暗黙知であった総合的な学習の時間の話し合い場面における教師の思考や判断の様相、および「協働」のイメージと方略を形式知としてまとめ、さらに話し合い場面における「協働」を見取る視点を整理した点については新規性が伺える。さらに、これらの知見を基にして「授業デザインシート」と「授業づくりガイドブック」という具体的な授業づくり支援ツールを開発した点で創造的である。したがって、本研究の創造性については、優れていると判断した。

#### 2. 論理性について

論文は、課題の整理から研究の目的、方法、結果、考察へと一貫した構成で論理展開されている。先行研究を精査し、概念の整理を行った上で研究課題を明確に設定している点が評価できる。しかし、文章内に冗長性も散見されたため、論理性については達成できている段階と判断した。

#### 3. 厳格性について

先行研究の検討や理論的枠組みの整理がなされて、研究の意義が位置付けられている。研究対象者の数が限られる点は課題だが、研修プログラムを通じて教師の意識変容や授業設計に関する認識変容について、質的データを用いた分析を行っている点は評価できる。しかし、論文全体が整理されきれてない部分が散見されるため、厳格性については達成できている段階と判断した。

#### 4. 発展性について

話し合い場面の「協働」の質を高める視点を明確にしたことは学術的、実践的な意義が大きく、今後多様な展開も考えられる点で本研究の価値は高い。さらに、開発したツールは教育現場への応用が期待され、さらなる発展も可能である。したがって、発展性については非常に優れていると判断した。

以上の4つの観点に対して本論文は全体的に達成していることから、論文審査を「合」と判定した。

論文審査結果

合・否

審査委員 主査 (氏名)

鷹岡 亮

(氏名)

中田 亮

(氏名)

高橋 俊章